

内容	演題	講師
四国の取組紹介 <b>【愛媛県】</b>	住民が地元の魅力を発信 ～住民ディレクターの実践～	愛南リポーターズ 代表 兵頭 朝美氏
	<p>愛南町は人口2万3千人の町で、太平洋と豊後水道に面し、宇和海国立公園を有する自然豊かなところである。自然が人々の暮らしに恩恵をもたらしている。</p> <p>このような町において、平成24年度に総務省の地域情報化アドバイザー派遣事業に採択となり、住民ディレクター養成講座を開催した。また昨年は、愛南町役場が同省のICT地域マネージャー派遣事業を活用して、住民ディレクター育成講座等を開催した。この2回の事業で得た考え方が、私たち愛南リポーターズを支えている。</p> <p>仕掛けられる側として、どのように変貌を遂げてきたかを紹介したいと思う。まずはビデオを観ていただきたい。（「愛南ワンダーランド Vol.24 久良中学校校歌・城辺町民の歌」を視聴）</p>	
<p>さて、なぜこのような活動をしているのか。愛南町では、平成19年度に総務省が開催した映像制作研修会に参加したメンバーが、その後も不定期に集まって勉強を継続してきた。その流れで、私は愛南リポーターズの代表を仰せつかっている。活動を続けている中で、技術が壁となり、撮影や編集に自信がない人は面白さを感じることができない、という時期があった。その時、以前に住民ディレクターの話聞いたことを思い出し、その考え方を学ぼうと総務省の地域情報化アドバイザー派遣事業を利用した。</p>		
<p>愛南リポーターズが目指すところは、「人をつないで町を元気に」。メンバーは「愛南町で楽しく豊かに暮らすためには？」ということを考えている。その一つの答えが「まず自分たちが暮らしを楽しむことが大切」ということで、町を知る活動をしている。ここに大きく関わっていただいたのが「住民ディレクター」という考え方の提唱者である、福岡県のとうほうTVプロデューサー、岸本 晃（きしもと あきら）さんである。</p>		
<p>岸本さんの住民ディレクター講座により、映像をつくるプロではない私たちが、その土地で生活するプロとして、日々の生活の知恵を交換しながら暮らしを豊かにしていくことを学んだ。そして、番組づくりの企画力を持つ人をつくり、地域を活性化し、映像制作力よりも人とつながる力を大事にする愛南リポーターズへの転機となった。機材へのこだわりを捨て、制作の意識が高まり、バラバラだったメンバーの思いがひとつになった。</p>		
<p>こうして、町に住む視点とつながりを大切にした番組「愛南ワンダーランド」の制作が始まった。</p>		
<p>愛南リポーターズの主な活動は、月に1回の愛南ワンダーランドの制作、年に1回のふるさとCM大賞への応募、その都度のプロジェクトがある。</p>		
<p>町のCMづくりでは、毎年11月に選考コンペを開催し、本戦に応募する作品を選出している。コンペの開催でメイキングにも力が入り、作品のクオリティ追求の受け皿にもなっている。他の人の作品を観ることで、独りよがりにならないし、制作のモチベーションも上がっている。そのような中、愛媛朝日テレビの「ふるさとCM大賞えひめ'14」でCM大賞をいただき、県内外で200回上映され、大きな励みとなった。本作品は作詞・作曲もチームのメンバーが行った。作品をご覧いただきたい。（「なーしくんが工場長」を視聴）</p>		
<p>その都度のプロジェクトでは、昨年は町の合併10周年記念イベントを手伝ったり、WEB制作のプロジェクトを立ち上げた。また、学びの場プロジェクトとして、住民ディレクター育成講座などを実施し、新しい仲間作りをした。</p>		
<p>愛南リポーターズが大切にしていることは、まず自分が動くことである。自分のやりたいことを見つけ、自ら動く集合体でありたいと思っている。</p>		
<p>モットーは「ゆるくながく」である。無理せず活動を続けることが大切だと思っている。</p>		
<p>そして、「だれでもできる」ということである。私たちは番組づくりのプロではない。時間も技術もお金もないが、その土地での生活はプロである。自分のやりたいことが地域社会に役立つことにつながる。これらのバランスが大切だと思っている。</p>		
<p>活動にあたり、愛媛CATVの理解と協力が、リポーターズがしたいことを支え続けてくれている。</p>		
<p>番組の効果として、見ている人は町のことをより知ることができる。リポーターズの扱うテーマは多様であり、例えば愛南町がサシバ（渡り鳥）の飛翔ルートであることなどは、番組を見てはじめて知った、という声を住民から聞いた。住民も番組を通して地域の新たな価値に気づいている。</p>		
<p>また、番組を通してやりがいにつながっている。取材された人たちは、番組で取り上げると喜び、仕事への誇りにつながっている。</p>		
<p>作っている側としては、番組づくりを通じて仲間ができる。性別も年齢もばらばらな人との新しいつながりができる。編集会議は夢を語る場でもあり、悩み相談の場でもある。そして、ロケなどを通して問題解決能力が身に付くなど、人材育成のワークショップであるとも言える。尻込みしていた人たちも、「やればできる」に意識が変わってきている。CMづくりなどを通して、書店のプロデュース活動をした人などもいる。</p>		
<p>愛南リポーターズは、町外の友人、役場、ボランティア連絡会、愛媛CATVなど、様々な人に支えられて、階段を駆け上るようなことはないが、少しずつ成長している。</p>		
<p>地域には暮らしの知恵が溢れている。ゆるい、しなやかなつながりを大切にしながら、今後も愛南町の魅力を発信する活動を続けていきたい。</p>		
<p>&lt;質疑・応答&gt;</p>		
<p>原先生（香川大学大学院）：「映像のプロではないけれど、その土地での生活のプロ」というのは言い得て妙である。制作した映像はケーブルテレビで出ているのか。ネット上でも見ることができるのか。また、愛南リポーターズの組織的な位置づけを教えてください。</p>		
<p>兵頭氏：番組「愛南ワンダーランド」は月に1回更新している。ケーブルテレビで放送しているが、YouTubeでもご覧になれる。活動の位置づけとして明確なものはなく、ボランティアでもサークルでもない。ボランティアの活動の延長線上に、新しい芽として地域で育ってきているものだと感じている。</p>		